

出帆

芥川龍之介

青空文庫

なるせ
成瀬君

君に別れてから、もう一ひとつき月の余になる。早いものだ。この分では、存外容易に、君と僕らとを隔てる五、六年が、すぎ去ってしまうかもしれない。

君が横浜を出帆した日、銅鑼どらが鳴つて、見送りに来た連中が、皆、梯子はしご伝いに、船から波止場はとばへおけると、僕はジョオンズといっしょになった。もつとも、さつき甲板かんばんではちよいと姿を見かけたが、その後、君の船室へもサロンへも顔を出さなかつたので、僕はもう帰つたのかと思つていた。ところが、先生、僕をつかまえると、大元氣だいげんきで、ここへ来るといつでも旅がしたくなるとか、己おれも来年かさ来年はアメリカへ行くとか、いろんなことを言う。僕はいいかげんな返事をしながら、はなはだ、煮切らない態度で、お相手をつとめていた。第一、ばかに暑い。それから、胃がしくしく、痛む。とうてい彼のしやべる英語を、いちいち理解するほど、神経を緊張する氣になれない。

そのうちに、船が動きだした。それも、はなはだ、緩慢かんまんな動き方で、船と波止場との間の水が少しずつ幅を広くしていくから、わかるようなものの、さもなければ、ほとんど、動いているとは受取れないくらいである。おまけに、この間の水なるものが、非常にきた

ない。わらくずやペンキ塗りの木の片が黄緑色に濁った水面を、一面におおっている。どうも、昔、森さんの「さんぼし棧橋」とかいうもので読んだほど、小説らしくもなともない。

麦わら帽子をかぶって、茶の背広を着た君は、扇を持って、こつちをながめていた。それも至極通俗なながめ方である。学校から帰りに、かんだ神田をいっしょに散歩して、すだちよう須田町へ来ると、いつも君は三田行の電車へのり、僕は上野行の電車にのった。そうしてどっちか先へのったほうを、あとにのこされたほうが見送るといふ習慣があつた。今日、船の上にいる君が、はとば波止場をながめるのも、その時とたいした変わりはない。（あるいは僕のほうに、変わりがないせいだろうか）僕は、時々君の方を見ながら、ジョオンズとでたらめな会話をやつていた。彼はクロンプトン・マッケンジイがどうか言つたかと思うと、ロシアの監獄へは、牢ろうやぶりの器械を売りに来るとかなんとか言う。何をしゃべっているのだか、わからない。ただ、君を見送つてから彼が沼津へ写生にゆくということだけは、何度もきき返してやつとわかつた。

そのうちに、気がついて見ると、船と波止場との距離が、だいぶん遠くなっている。この時、かなり痛切に、君が日本を離れるのだという気がした。皆が、成瀬君万歳と言う。君は扇を動かして、それに答えた。が、僕は中学時代から一度も、大きな声で万歳と言つ

たことがない。そこで、その時も、ただ、かぶっていた麦わら帽子をぬいで、それを高くさし上げて、パセティックな心もちに順応させた。万歳の声は、容易にやまない。僕は君に、いつか、「燃焼しない」（君のことばをそのまま、使えば）と言つて非難されたことを思い出した。そうして微笑した。僕の前では君の弟が、ステッキの先へハンケチを結びつけて、それを勢いよくふりながら「兄さん万歳」をくり返している。……

後甲板^{こうかんばん}には、ロシアの役者が大ぜい乗つていた。それが男は、たいてい、うすぎたない日本の浴衣^{ゆかた}をひっかけている。いつか本郷座^{ほんこうざ}へ出た連中であるが、こうして日のかんかん照りつける甲板に、だらしない浴衣がけで、集っているのを見ると、はなはだ、ふるわない。中には、赤い頭巾^{ずきん}をかぶった女役者や半ズボンをはいた子供も、まじつていた。——すると、その連中が、突然声をそろえて、何か歌をうたいだした。やはり浴衣がけの背の高い男が、バトンを持つているような手つきで、拍子^{ひょうし}をとっているのが見える。ジヨオンズは、歌の一節がきれるたびに、うなずいて「グッド」と言った。が何がグッドなのだが、僕にはわからない。

船のほうは、その通り陽気だが、波止場のほうはなかなかそうはいかない。どっちを見ても泣いている人が、大ぜいある。君のおかあさんも、泣いていられた。妹たちも泣いて

いたらしい。涙は見えなくとも、泣かないばかりの顔は、そこにもここにもある。ことに、フロックコウトに山高帽子やまたかぼうしをかぶった、年よりの異人いじんが、手をあげて、船の方を招くようなまねをしていたのは、はなはだ小説らしい心もちがした。

「君は泣かないのかい」

僕は、君の弟の肩をたたいて、きいてみた。

「泣くものか。僕は男じゃないか」

さながら、この自明の理を知らない僕をあわれむような調子である。僕はまた、微笑した。

船はだんだん、遠くなった。もう君の顔も見えない。ただ、扇をあげて、時々こつちの万歳に答えるのだけがわかる。

「おい、みんなひなたへ出ようじゃないか。日かげにいると、向こうからこつちが見えない」

久米くめが、皆をふり返ってこう言った。そこで、皆ひなたへ出た。僕はやはり帽子をあげて立っている。僕のとおりには、ジョオンズが、怪しげなパナマをふっている。その前には、背の高い松岡まつおかと背の低い菊池きくちとが、袂たもとを風に翻しながら、並んで立っている。そう

して、これも帽子をふっている。時々、久米が、大きな声を出して、「成瀬なるせ」と呼ぶ。ジヨオンズが、口笛をふく。君の弟が、ステツキをふりまわして「兄さん万歳」を連れんきよう叫うする。——それが、いよいよ、君が全く見えなくなるまで、続いた。

帰りぎわに、ふりむいて見たら、例の年よりの異人いじんは、まだ、ぼんやり船の出で行った方をながめている。すると、僕といっしょにふりむいたジヨオンズは、指をぴんと鳴らしながら、その異人の方を願あじでしゃくつて He is a beggar とかなんとか言った。

「へえ、乞食こじきかね」

「乞食さ。毎日、波止場をうろついているらしい。己はここへよく来るから、知っている」それから、彼は、日本人のフロックコオトに対する尊敬の愚ぐなるゆえんを、長々と弁じたたてた。僕のセンチメンタリズムは、ここでもまたいよいよ「燃焼」せざるべく、新に破壊されたわけである。

そのうちに、久米と松岡とが、日本の文壇の状況を、活字にして、君に報ずるそうだ。僕もまた近々に、何か書くことがあるかもしれない。

(大正五年九月)

青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.wtiyama

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

出帆

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>